

日本産漆を支援する

NPO法人

壱木呂の会

I C H I K I R O

- 漆搔き道具の技術継承 -

会 報
第 15 号 / 2017年11月発行



漆掻き用具製作の技術保存事業

植栽事業

3

漆掻き道具の技術継承

8

第6次壱木呂の会ウルシ畠と長野県伊那市での植栽会

「長野での漆の植栽に参加して」

「壱木呂の会第1見本林における調査漆掻き報告」

賛助会員

富永

10

「壱木呂のオーナーのプレート掛け」

9

「長野での漆の植栽に参加して」

「壱木呂の会第1見本林における調査漆掻き報告」

奥久慈荻房

司

11

「壱木呂のオーナーのプレート掛け」

8

「長野での漆の植栽に参加して」

「壱木呂の会第1見本林における調査漆掻き報告」

3

「壱木呂のオーナーのプレート掛け」

3

理事 石井 昭

理事 石井 昭

理事 石井 昭



4月12日東京の荻房にて、漆掻き用具の製作にあたって協力を頂いている長野の漆掻き竹内義浩氏から、漆かき道具に関する説明や、漆掻き職人の現況をお話をいただきました。



竹内 義浩氏 略歴

1972	埼玉県浦和市生まれ
1994-2003	株式会社木曾アルテック社勤務 (家具や建築内装拭き漆・漆和紙製作等職人として)
1996-1999	香川県漆芸研究所研修生
2004	長野県駒ヶ根市に竹内工芸研究所開設 (漆創作・修理・日本産生漆生産)
2005	同市内で漆苗木植栽をはじめる
2007-2011	淨法寺・大森俊三氏のもとで漆掻きを覚える (平成19年度日本うるし掻き技術保存会長期研修生)
2012-	長野県内を中心に漆掻き
2013-	木曾漆器工業協同組合精漆工場業務請負(漆精製) 同組合漆林の管理

現在、信州産漆生産サイクルの確立を目指して信州ウルシ保存会(漆林育成・管理)設立に向けて奔走中
日本文化財漆協会常任理事
日本うるし掻き技術保存会会員
現代工芸美術家協会会員 木曾漆器工業協同組合員

長野県で唯一人の漆掻きさんで、今年も会員の漆を掻いて頂きました。

「漆掻き道具の技術継承」

漆掻き用具製作の技術保存事業

理事 石井 昭



漆掻きに必要な道具は5種類ほどあります、その中でもウルシの木に溝（傷）を付けていく道具は漆力ンナと呼ばれ、使用する頻度も高く漆掻き職人にとっては「命」とも言える道具です。他の道具では多少の妥協ができるも漆カンナだけはかなり完璧に仕上がりついで、漆掻きの作業性、ひいては生産性に大きく影響してくるからです。それ以上に重要なことは、出来の良くないカンナを無理に使つていると、ウルシの木そのものを弱らせる原因となり、最悪の場合は漆が出にくくなったり枯れることもあると言われています。

この様に重要な道具を作れる鍛冶職人が、全国でも岩手県にただ一人になってしまったことは、皆さんもご存知のことだと思います。道具が途絶えるということは漆文化の根幹が崩れてしまいかねないと黙り言ではありません。更に関係者が危機感を強めているのは2015年に文化庁から出された平成30年より下地から上塗まで「国宝・重要文化財建造物の保存修理では、国産漆の使用を原則とする」という通達であります。ようやく日本産漆増産に繋がる国の施策が実現した事は大変喜ばしいことです。しかし一方では急激な国産漆の需要増には生産の体制が全くと言つていいほど整っていないのが現状です。国や地方自治体、それに主だった漆産地ではウルシ苗の植栽、漆掻き職人の育成を積極的に開始しようとしています。また国産漆の主要産地である岩手県二戸市では漆道具を作れる若手の鍛冶職人の人材開発を進めているとのことです、大幅な需要増を貽うこととはとても大変なことです。

各地に漆畠が作られ、漆塗職人が何處にいても漆塗き、それぞの場所で道具が作れる状況を整えていくことが重要です。

このためには、鍛冶職人が何處にいても漆塗き道具制作の技術・ノウハウを確実に習得できる『高度な教材』を用意しておくのも一つの解決策であると考えています。

壱木呂の会が2016年度から重点目標として掲げていることの一つがこの「漆塗き道具の技術継承」に関する取組です。これは時間と費用の掛かることで、テルモ「芸術文化支援活動」の支援に応募させて頂きました。



小信製作所にて斎藤和芳氏の作業風景

テルモ「芸術文化支援活動」の 助成金を受けける

医療機器のメーカーであるテルモ株式会社はメセナの一環として「芸術文化支援活動」を開催していますが一般にはあまり知られていません。今回、当会理事の赤地友敬氏のご子息で東京藝術大学准教授の林卓行氏に情報提供をいただき当会としても「肝試し」のようなつもりで応募をいたしました。書類の作成等初めての経験ではありましたが、明治大学名誉教授の宮腰先生の推薦文もいただき、幸いにも200万円の最高額の助成金を受けることが出来ました。活動の財政的裏付けが確保できたことは大変に心強いものであります。これもひとえに日本の漆文化の継続のために20年近く「壱木呂の会」の地道な活動に参加される会員・賛助会員・漆の木のオーナー諸氏のお陰と、心より感謝の意を表するものであります。

今年の春から活動を開始して半年が経過する中、まだ方向性を模索している段階ではあります。が少しずつ道筋が見え始めている状況です。

鍛冶と漆塗きの協力者

『高度な教材』として我々が用意しようとしているのは3種類あります。

●漆塗き道具の制作工程を詳細に記録した動画を作成

●完成度の高い漆塗き道具の標準品を3Dデータとして図面化

●制作工程を分解し材料選定、加工方法、検証方

法等の技術解説書の作成

これらを進めるにあたり、まず解決しなければならなかつたことが、道具を作る鍛冶と、その道具の良し悪しを検証する漆塗きの、2職種の協力者を見つけだすことでした。

幸いにも我々の活動の意義を深く理解したうえで、広い知見を持った専門の立場から重要な場面での示唆・助言をもらえる協力者が参画し、共に活動をして貰えることになりました。

鍛冶では東京の鍛冶工房「小信製作所」（以下

小信）の斎藤氏の協力を得られることになりました。小信は代々美術工芸関係のノミ、彫刻刀を専門につくられており、その切れ味の良さでは絶大なる信頼が寄せられています。

小信は数年前から当会の本間理事長が二戸市の「日本うるし塗き技術保存会」に紹介し、子息

2017年度 6ヶ月の活動概要



中畠氏作成の漆カンナ制作工程サンプル(抜粋)資料提供：東京文化財研究所

6月・上野の「東京文化財研究所」で漆塗りの道具に関する調査研究をしているという情報を得ました。

東京文化財研究所に唯一の漆塗り道具の鍛冶技術保持者である中畠氏が作成した、漆カンナの制作工程を10数工程に分類した制作工程見本があることで、見学に行く。

鍛冶の斎藤氏、本間理事長、映像担当の杉本信氏、私の4名で伺い、担当の小林先生、江村先生から研究の内容とサンプルの説明を受けた。斎藤氏は今まで一箇所だけ、どの様に作っているか分からなかつた所が判明したと言うことで大きな成果が得られた。



<小信>斎藤氏の二次試作品、10月末から長野竹内氏と茨城本間健司氏による実使用検証が行われている。

8月・長野の竹内氏の漆塗り現場を訪問し、漆塗き作業の動画を撮影した。実際に道具をどの様に使い、その使い方によつて漆液がどの様に滲出するかを、なかなか見る機会がありません。しかも道具や調整に不都合な点がある場合の画像は、今後技術を習得しようとする人達にとつては貴重な情報になると期待されます。

合わせて、3月に竹内氏に委託した斎藤氏制作の漆カンナの試用結果を聞き取り調査をして、何点かの不具合が指摘されました。年数の経つた割と太めの木が多いという条件はありますが、有用な情報を得ることができた。

9月・竹内氏の試用結果を斎藤氏にファイードバックしました。動画を見ながら具体的にこの様な使い方でこうなるという状況を説明し、斎藤氏の今までの経験値も含めて良く理解してもらうことができました。

10月1日のクロメ会の折、奥久慈荻房の本間健司氏とスタッフの富永司氏に斎藤氏のカンナを試用してもらい、使用感の聞き取り調査を行いました。長野の竹内氏の感触と同傾向ですが、ニュアンスが多少違う少し使い慣れて、研ぎの調整をすれば使えそうとの意見をもらいました。使い手によっても道具に対する感じ方が違うということが具体的な情報として得ることができた。

その後、小信での一次試作の結果を踏まえ、二次試作品の制作が行われました。火造りという地鉄（じがね）にハガネを貼り合わせる工程、それを所定の大きさに切り出し焼いては叩くことを繰返し、少しづつ形を作っていく工程、平面的に整えられた形を三次元的に曲げて、ウルシの木皮に溝を削るためのU字型を作る工程、最後にハガネの強度（硬度）を出す「焼入れ」ハガネに適度な韌性を持たせる為の「焼きなまし」工程という一連の作業が行われました。斎藤氏の今まで苦労された点、製作上の特に注意を要する重要な点、失敗を繰り返しながら創り上げてきた治工具の説明などをお聞きしながら作業を見学した。あわせて撮影担当の杉本氏が全工程を動画記録する為のテストをし、光の具合、工程ごとの撮影ポジション、鍛冶という明暗の差が非常に大きい被写体の画創りのチェックを行い本撮影の準備がすすめられた。

今後の予定として、二次試作品を数本づつ長野の竹内氏と、茨城の本間健司氏に試用してもらい、

最後に

最近、伝統工芸の世界で「絶滅危惧種」という単語が頻繁に使われるようになつてきました。関係する人間にとつては心の重くなる言葉ですが、どの分野でも材料・道具・後継者の確保が危機に瀕しているのは事実です。

老木呂の会でも、この解決のために少しでもお役に立てばとの思いを強くしています。まだ始まつたばかりの技術保存活動ですが皆様方のご協力とご助言をよろしくおねがいいたします。特にこれから漆塗り道具の鍛冶技術を習得してもらえる若い方を探しています。地方でこれぞという鍛治職人さんがいましたら是非ご紹介または情報提供をお願いします。

第6次壱木呂の会ウルシ畑と長野県伊那市での植栽会

今年度は3月と4月に茨城と長野にて植栽を行いました。
活動内容をご報告します。

第6次壱木呂の会ウルシ畑

3月26日午前から、常陸大宮市舟生地区に、神長奥久慈漆生産組合長の指導のもと植栽しました。あいにくの小雨混じりの天気でしたが会員を始め地元の皆様の協力を頂き2626m²の土地に188本の苗木を植えました。

午後からは、分根漆苗の掘り起こし作業を行いました。

参加者の多くは初めての作業でしたので興味深く熱心に神長組合長の指導を受けていました。



「長野での漆の植栽に参加して」

賛助会員 長野県在住 宮崎 聖良

去る2017年4月16日、壱木呂の会メンバーの皆さん、漆搔きの竹内義浩さん、NPO法人「森の座」の方々と共に、長野県伊那市で行われた漆の植栽に参加させていただきました。

当日は天候にも恵まれ、まずは竹内さんの漆搔きの実演を見学させていただきました。

以前、何人かの方の漆搔きを見せてもらっていましたが、やはり人それぞれに少しずつ異なるやり方で漆搔きをしていらっしゃるのだなと感じました。その後、奥久慈漆生産組合長神長氏から漆の植栽方法を教わり、総勢19名（壱木呂の会10名）で150本の漆の苗を植えました。

苗を植えるための穴をスコップで掘る際、掘る場所によつては大きな石に当たりなかなか深く掘れなかつたり、組合長から教わったような穴を上手に掘れなかつたりなど、様々な苦労を乗り越えつつ、汗を流しながら全ての苗を植え終え、きれいに並んだ漆の苗とバックの山々の風景が格別でした。

私は、1年ほど前から漆を植えたいと言い続け、全国あちこちで開催される漆の植栽イベントに参加してきましたが、まさかこんなにも早く地元で漆を植えることが出来るなんて、感無量でした。これも、「壱木呂の会」に出会えたおかげです。

私自身は漆に携わる仕事でもなく、自分の興味・関心からこういった活動に参加させていただいておりますが、いつも温かく迎え入れていただき、本当に感謝しております。

長野県の漆、これからも見守つていくと同時に、もつともつと漆を増やしていくように、微力ですがなるべく多くの活動に関わつていけたら、と思つております。

この度、壱木呂の会の植栽された木を搔かせていただきました。

まだ10年は経っていない林ですが、管理を丁寧にしている見本林なので成長は順調です。

今年は森林総合研究所の田端先生の指示により、予め150本以上のウルシ木に番号を付け、それぞれの葉のDNAを調べて頂くことから始まりました。

前年までの調査を元にDNAの異なる3種類20本の木を選び、搔くことになりました。

それぞれ、かなりよく出る品種8本、よく出る品種8本、奥久慈では一般的な出方と考えている品種4本の計3組です。

8本ずつ作業する2組の木は3回に分けて木の皮と材部の一部を切り取り試験片を2本ずつ取りました。そして試験片を切り取った木はその先の採取は行わない指示がありました。最後の頃には8本ずつ2組の木も各2本になりました。（2本、2本、4本計8本に）

搔き方も一般的には木の両側に6箇所ずつ付けていますが、今回の作業では両側に4箇所ずつ8箇所、20本で160箇所の傷で統一しました。

漆掻きは目立てという小さく傷を付ける作業から始まります。調査対象20本の片側の80箇所にだけは特殊な薬剤を塗布し、他方にはその薬剤の影響が出ないようにする別の薬剤を塗っていました。最後まで薬剤を付けたままで作業をし、薬剤による漆の収量の変化を調べたようです。漆掻き作業時は別々に合計6個の容器をもって現場に向かい、

毎回6個に仕分けをする必要がありました。厳密にはカンナも、搔き取るヘラも別々にすべきでしょ
うが、これ以上煩雑になると作業自体が困難になる可能性があるので、勘弁してもらいました。

作業は一般の方には分かり難いと思いますが、次のような手順で行いました。

6月20日 目立て作業から始まりました。
7月7日 1回目の試験片を採取。3回目の傷を付けるまでは漆を採取しません。

7月8日 この日の4辺目（4回目）から8辺目まで初辺漆の採取を始めました。

8月1日 2回目の試験片を採取。
8月5日 9辺目より盛辺漆の採れ始めとしました。

8月29日 3回目の試験片を採取。
9月1日 14辺目からは遅辺漆としました。

10月9日 20辺目にて今年の作業を終了。

8月29日 3回目の試験片を採取。
9月1日 14辺目からは遅辺漆としました。

10月9日 20辺目にて今年の作業を終了。

どうなるのかと心配でした。

そして8月になり、なぜか連日の雨。雨。雨。

幸い今回の試験漆掻き作業自体は手間がかかりませんが、天気の合間をぬつて続けて

いけました。そして九月以降は涼しい日が多く、暑くなつても2、3日もすれば落ち着き概ね過ごしやすい状況でした。

私の試験漆掻き作業は今年で3回目でしたが、問題があるかと思います。

今回の試験データは、あたえられた状況でベストを尽くしたとしか云えません。

ウルシの木を壊さず、最後まで大きな問題もなくコンスタントに作業を終えたことが、ほんのすこし満足な気持ちです。

この調査の結果、一般的な木の2倍以上の漆を採取できる品種が特定され、今後の漆植栽事業にも貢献できることは、係わらせて頂けた者として大変有難いことでした。

今年掻かせていただいた20本の木は数ました。

採れる漆の量も少量なので時間をかけていてはどんどん空気に触れて硬化してしまいますので、手早く作業をしなければなりません。

漆の良く出る木は、搔き傷から溢れ木肌に流れました。

毎回6個に仕分けをする必要がありました。厳密にはカンナも、搔き取るヘラも別々にすべきでしょ
うが、これ以上煩雑になると作業自体が困難にな
る可能性があるので、勘弁してもらいました。

今年も新たに4本の木にオーナーが決まり、壱木呂の会ウルシ畑にて会員がそれぞれの木にプレートを掛けました。

漆の木オーナー制度

2013年より始まりました「漆の木オーナー制度」により、現在約80本の木にオーナーになつて頂いております。

今年も新たに4本の木にオーナーが決まり、壱木呂の会ウルシ畑にて会員がそれぞれの木にプレートを掛けました。



毎回6個の容器に分別



富永司氏による漆掻き

出て黒くなり、採りこぼしが多いと思われてしまいます。しかし薬剤が塗布してあるので、搔き傷から溢れた漆は、薬剤が混ざるため、ヘラでしごき採るとことが出来ません。

田端先生からも「これだけ出ているものを、なんとか採りきつてもらえたら採取量に違いができると思うのだけれど」と言われましたが、「難しいです」と答えた次第です。

前回の試験作業でも、とりこぼしの件は指摘があり、30分ほど現場で待機してきつちり最後まで採りきつてきたこともあります。が、遅辺の頃だったことも勢いがなく採取量に大きな差はでませんでした。

試験作業は、まだまだいろんな課題や問題があるかと思います。

今回の試験データは、あたえられた状況でベストを尽くしたとしか云えません。ウルシの木を壊さず、最後まで大きな問題もなくコンスタントに作業を終えたことが、ほんのすこし満足な気持ちです。

この調査の結果、一般的な木の2倍以上の漆を採取できる品種が特定され、今後の漆植栽事業にも貢献できることは、係わらせて頂けた者として大変有難いことでした。

今年掻かせていただいた20本の木は数ました。

本を除き伐り倒しません。

傷の範囲が少ないので、数年後までに回復してまた搔くことができるよう育つてくれると思います。





会報
第15号／2017年11月発行
- 漆書き道具の技術継承 -

NPO法人 壱木呂の会事務局
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪2-27-3
Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147
<https://1kiro.jp/> nihonsan@1kiro.jp
 <https://www.facebook.com/1kiro.jp/>